市民グループとのタウンミーティング　議事概要

日　時	令和６年７月１６日（水）午後１６時００分～午後１７時００分
グループ名	交野市ボランティアグループ連絡会
場　所	交野市ボランティアセンター２階活動室
参加人数	１１人

テーマ1　少子高齢化に伴う諸問題にボランティアはどうかかわれるのか

趣 旨（市民グループ）

- ボランティアに携わる方は少子高齢化に伴い減少しており、厳しい状況は今後も続くと思われる。そのため、我々としても何か行動することが必要であると考えている。その第一弾として本日のタウンミーティングを開催した。ボランティアの三大要素として、①自主性「個々が自分の意志で判断・行動し、心身ともに健康・健全であること」、②無償性「社会問題を解決するにあたり、コストを極力発生させないこと」、③社会性、が挙げられる。ボランティア活動は福祉部門との相性がよい。そして交野市の地域福祉活動計画にも組み込まれている、重層的支援体制整備に関しても、我々も担っていかなければならないと考えている。
- 現在、交野市ボランティアグループ連絡会は１０グループが所属しており、幅広く活動している。例えば、朗読グループ「あい」では、目の不自由な方に向けた音訳活動をしている。市では広報・議会だより等は音訳していないが、分担してボランティアで音訳活動をしている。活動的な高齢者も増えてきており、働いている方も多い為、ボランティアに参加される方が少なくなってきていることも事実である。何かの形で解決策を模索できれば良いと考えている。

市 長

- 少子化の中、働き手が減少しており、厳しい状況が続いている。
- 最近は高齢でも働いている方は多くいる。
- 市役所でも定年延長や再任用もあり６５歳までは働くことが出来る。そういった環境のため、ボランティア活動に携わる方も高齢化が進んでしまう。
- 今後、定年が７０歳まで延長される可能性もある。しかし、７０歳以降に積極的にボランティア活動に携わることは、中々困難であるが、避けようがない。
- 私としてはボランティアでしか出来ない活動もあるため、市民に積極的にボランティア活動に携わってほしいと思っている。
- 自主性が大切なため、強制は出来ないが、ボランティアにしか出来ない活動もある。行政として広報等はインターネットに掲載しているが、音訳までは困難であるため、ボランティア活動は重要であると考えている。今後も活動は継続してほしいと考えている。
- 行政は、人数不足に対して呼びかけを行うことは出来ると考えている。
- ハード面も支えることは出来ると考えている。ボランティアの方が集える場所を確保することは市の役目であると考えている。
- 過去より交野市にはボランティアセンターはあったが、市民活動センターは存在しなかった。それだけを見ても交野市はボランティアに力を入れてきた。その方針は変えない。

- しかし、市が直営で行うことは困難である。社会福祉協議会に依頼し維持・運営をしているが、現在の体制を維持してほしいと考えている。

意 見

- 過去、健康フェスティバルのバザーに娘が行った際に、ボランティアの方がすごく優しいと言っていた。また、こどもゆうゆうの広報でボランティアの募集があり、現在に至るまで継続している。ボランティアセンターと広報はとても良かった。

  →〔市長〕過去は、市とボランティアは関りが強かった。場合によっては、市がボランティア団体を作り、独り立ちをさせるという仕方をしていたが、近年においては、市と団体が離れてしまった。少子高齢化で担い手も少なくなり、継続も困難。また、建物等の管理も必要である。ボランティアは、トータルとして市にも還元されるため、金銭面等可能なところは市が補助をすべきだと考えている。

- 交野市はハード面については昔に比べ潤っている。その面については非常に感謝している。しかし、各グループのボランティア活動に対しては少子高齢化で活動が停滞している。高齢化も問題であるが、それよりも少子化の問題の中、子どもたちに対して我々が何か出来ないかを考えている。福祉活動の一環として、学校と関わることもある。点訳のボランティアをしており、教育現場（学校）から要請があれば、ありがたく活動している。しかし、要請のある学校もあれば、無い学校もある。以前はそういった偏りはなかったが、今は偏りがある。教育委員会に言えば良いのかと考えつつもどうしたら良いのか考えている。

  障がい者の高齢化の問題もある。高齢化が進むと、皮膚の感覚が無くなり、点字が読みづらくなる。中途失明の場合も点字が読めない。もっと点字が読める方が増えれば良いと思っている。そのため子どもにもっと点字に触れ合ってほしいため、学校での取組を増やしてほしい。

  →〔市長〕学校については、教育長は市長が任命しているが、指示は出来ない。最終的には学校・校長の判断になる。強制は出来ない。

- 交野市ボランティアグループ連絡会の設立前には、ボランティア協会があった。どのようにして活動者が集まったかと言うと、交野小学校にさくらんぼ学級という、障がい児学級が存在した。そこで給食の際の人手が少ないため、市の広報に募集があった。給食のお手伝いであれば、役に立てると考え募集をした。説明会には３０名も参加されていた。とある事情でその活動は終了したが、教育委員会の先生と、これだけの人数が集まったのであれば何かボランティア活動が出来ないかという話があった。当時は障がい者就学施設も無かったため、義務教育を終えると家にいることしか出来なかった。そのため、その方々と友達になって欲しいと依頼があり、役所の一室（別館）を借り、活動を開始した。とある知的障がい者の方は、当時学校にも通えなかったので、文字も読めず、電車に乗り親族に会いに行くことも困難であったが、一緒に勉強をしたところ一年で５０音全て読めるようになった。手紙も書けるようになった。しかし、我々だけでコーディネートは困難であったため、市と交渉し、社会福祉協議会と連携してはどうかという話になり、協議会が設立された。高齢になっても、誰かのために活動することは、自分自身も元気になれる。しかし、高齢になると足が不自由になる問題がある。ゆうゆうバスが無くなり、当施設に来ることが困難になった方も多い。また、現在車で来ている方も将来的に免許を返納すると来ることが困難になる。市として何か協力いただけないか。

→〔市長〕ボランティア活動は、他の方も自分も元気になれるというメリットがあるため、周知していくべきであると考えている。

また、移動手段の確保は重要であると考えている。ゆうゆうバスを廃止したが、路線バスが残ったわけではない。現状難しい問題を抱えている。市の方で走らせている、寺・神宮寺のワゴン車を延伸させ、松塚方面も追加で走らせる等、問題解決を図っている。京阪バスが現在、運行している箇所も今後動きがあるため、市として運行しようと考えている。京阪バスは近年、路線の改定の際に今までであれば河内磐船に停車していたが、停車しなくなった。確かに星田は停車するようになったが、ゆうゆうセンターにどのように来たら良いのかとお話しも聞いているため、現在、京阪バスと協議をしている。月を改めて市民にお示しをしたいと考えている。路線バスが運行しない箇所は市がワゴン車を走らせようと考えている。

また、免許証の返納を行った方に対しては一回限りであるが、１万円相当の支援を行っている。外出支援については年間４，６００円の交通費を支給している。可能な限り高齢者が主要な箇所に赴けるようにしたいと考えている。

- 東大阪市では月２，３００円でシニアカーを借りることができる制度がある。また定期的にメンテナンスもしてもらえる。そういった制度はどうか。

→〔市長〕本市においても、シニアカーや電動自転車の補助については要望として聞いている。また市議会においても提案があったことは事実である。しかし、本市においては路線バスの最低限度の外出支援が出来ていないため、そちらを先に実施させてほしいと言っている。検討はする予定である。

電話でタクシーを呼べる制度の導入検討も現在行っているところであり、最終的にどうするのかは、本年度中に方向性をお示し出来ればと考えている。それでも意見があれば、電動自転車等の補助の導入も検討はする。

- 星田西の山の方に住んでいる方は、バスが一時間に一本であり、高齢者も多い為、大変だと考えている。

「さつき」という手話サークルをしており、聴覚障がい者の方に対して支援を行っている。手話については、過去から市で実施している初級・中級クラスのステップアップ講座で勉強をしているが、上級クラスが去年は無かった。一昨年までは上級クラスのステップアップ講座があったので復活させてほしい。

→〔市長〕交野市は手話の条例を制定した経緯がある。上級クラスについては確認させてほしい。若い方でもボランティアを行ってはいるが、個別で点と点として行っているだけで継続性のある方は少ない。一緒に行えるところは共に実施してほしい。そうするとボランティア全体の活性化に繋がると考えている。このような場に、若い方に顔を出していただいて交流していくべきだと考えている。そこは行政がしっかり呼びかけをしていくべきだと考えている。

- 朗読グループ「あい」に所属している。定年後に、お金がかからない形でなにか社会に携われることはないかと考えて、広報を見て応募した。自分自身の健康寿命を延ばすためにもボランティア活動は重要であると考えている。また、横のつながりが重要であると考えている。ボランティアは楽しいということも分かち合いたい。

→〔市長〕ボランティア活動や地域活動を行っている方は、複数の活動を行っている場合が多い。き

っかけがあって始めている方が多い。市としてはきっかけを作るということは重要であると考えており、その中での行政の役割は大きい。特に交野市の場合、広報を読んでいる方が多い。市としては、情報収集が出来る媒体の提供や改善に力を入れていきたい。また、健康福祉フェスティバル等、市民が触れ合える場も提供し、ボランティアを始めやすい環境整備に力を入れていきたい

- ３０周年記念の際も市長・副市長に来ていただいた。今は距離が近く、福祉のことに関心を持っていただいていると実感している。

  ボランティアの方と関わらせていただいていると、本当に良い活動をしていると実感する。おしとやかで自分の実績を誇らない方々ばかりである。良い活動をしているため、発信・PR したい。皆さんの活動が認められると、活動の幅も広がり、携わる方も増えると思われる。社会福祉協議会としても、福祉活動を様々なところで行っているが、副市長が福祉部長の時に、活動について良いことであると言っていただけたことで気付くことが出来た。市が発信・PR を後押ししていただければと思う。

→〔市長〕現在、ボランティアは指定管理で行っているが、その点についてどう思うか。

- 建物は指定管理であるが、ボランティアの推進は自主事業である。自主事業の中で、職員事務一名、コーディネーターを配置している。最近は、ボランティアも高齢化しているため、活動を継続するためのフォローが多くなってきていると感じている。様々な解決方法を模索し、大学を回って学生の力を借りられないかという話も出ているが、中々手が届かないということが実情である。

→〔市長〕市がボランティアセンターに職員を配置することは難しい。また、市がボランティアセンターを運営することや、職員にボランティアを手伝うようにすることも困難。しかし、利用されている方の意見を聞きながら、今後の当施設の管理体制を最終的にどうしていくか協議をしていきたいと考えている。

- 社会福祉協議会という、福祉の目線でのまちづくり視点を持っている団体が、指定管理者であることは、日頃業務を行っていても、理にかなっていると思う。
- アメリカでは多くの方がボランティアをされているが、日本は少ない。以前に資料を見た際には、日本では７００万人のボランティアがいるとのことだった。しかし、実際には５分の１程度であると思われる。そのため、日本は伸びしろがある。人口比からするとまだまだ少ない。しかし、ボランティアは日本では文化的な相性がそこまで良くない。上手く方法をとれば、ボランティアの人数は増やせると考えている。しかし、どのように発信すれば良いのか分からない。手段もない。社会福祉協議会なのか市に協力を仰げばいいのか分からないが、若者や元気な高齢者に活動を経験していただくような、誘導の方法等を一緒に考えていきたい。そうすると将来的に市のためにもなると考えている。その一環として、本日市長に PR したい。

→〔市長〕日本はアメリカや欧州に比べて寄付やボランティアは税金を支払っているため活動しないという風潮がある。市として実施出来ることは、市民にボランティアの意識を持っていただくことである。市としては、本年度にトイレトラックのクラウドファンディングを始めた。今回のクラウドファンディングやボランティアは社会性があるため、市民にも関心を持ってほしい。ボランティア関係のクラウドファンディングも実施出来ればと思う。今後検討する。